

**立教大学学術推進特別重点資金 (立教 S F R)**

**大学院学生研究**

**2015年度研究成果報告書**

<b>研究科名</b>	立教大学大学院 異文化コミュニケーション研 究科 異文化コミュニケーション専攻		
<b>研究代表者</b> (2016年3月現在のものを記入)	在籍研究科・専攻・学年		氏名
	異文化コミュニケーション研究科 異文化コミュニケーション専攻 博士課程後期課程1年		合崎 京子 印
<b>指導教員</b>	所属・職名		氏名
	異文化コミュニケーション研究科・ 教授		平賀 正子 印
<b>自然・人文・社会の別</b>	自然 ・ 人文 ・ <input type="checkbox"/> 社会	<b>個人・共同の別</b>	<input type="checkbox"/> 個人 ・ 共同 名
<b>研究課題</b>	「自閉症スペクトラムを持つ人の社会的言語使用について」		
<b>研究組織</b> (研究代表者・共同研究者) ※2016年3月現在のものを記入	在籍研究科・専攻・学年		氏名
	異文化コミュニケーション研究科 異文化コミュニケーション専攻 博士課程後期課程1年		合崎 京子
<b>研究期間</b>	2015 年度		
<b>研究経費</b> (1円単位)	(支出金額) 200,000円 / (採択金額) 200,000円		

**研究の概要** (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究では、文献調査を基盤とした自閉症スペクトラム (以下 ASD) を持つ人のコミュニケーション分析を目的とした理論枠組みの構築、並びにその枠組みに基づいた談話分析を行った。

まず、文献研究を通し ASD を持つ人に対する相互行為分析理論の構築を試みた。そのうえで 1) ASD を持つ人の独特な認知特性の自然会話における表出、2) 症状の当事者が会話中で呈示するスタンスと、彼らの社会文化的背景及び会話のコンテクストの関連性について調査を行った。以上の結果、ASD のコミュニケーション障害は相互行為のコンテクストに強く依存すること、また今後 ASD の症状がコミュニケーションに反映される具体的な様相を明らかにできる可能性があることを示唆した。

**キーワード** (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[自閉症スペクトラム] [コミュニケーション] [談話分析]

## 研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

## 1) 研究の背景と目的

ASD の症状を持つ人には他者の心的状態の類推が適切に行えず、社会的認知に障害があることが指摘されている。そして、そのような彼らが生得的に持つ認知メカニズムの障害は対人コミュニケーションに支障をきたす可能性もあることが論じられている。しかしながら、これらの研究の大半は、局所的かつ進行しているその場の相互行為にのみ注目し、個人に内在する認知メカニズムの特徴が、発話の構造や言語・非言語のどの部分に見出されるかを探るものであった。そのためその場には可視化されない相互行為者の社会文化的背景、相互行為の場面の状況及び、対話者との関係などの要因がコミュニケーションに及ぼす影響については言及されることが少ない。

加えて昨今においては、ASD を持つ人が抱えるコミュニケーションの困難さや具体的な症状は、明示的に言語化されないコミュニケーション、すなわちメタ・コミュニケーション上で顕在化する可能性が高いと解釈される傾向が高いことが明らかとなってきた。上述を踏まえ本研究では相互行為の多層的なレベルで生じた、会話参加者のメタ・コミュニケーションにおける症状の表出や対話者とのスタンスのずれを明らかにすることを目的とした。

## 2) 研究方法

本研究の方法は①：文献研究による基礎研究、②：①の基礎研究を応用した談話分析の実践である。

## 3) 分析

まず、①の文献研究では、これまで用いてきた分析の概念である「フレーム」及び、「フッティング」(Goffman, 1974)に加え、「スタンス」(e.g., Du Bois, 2007)、「クロッシング」(e.g., Rampton, 1995)等も新たに分析の視点に取り入れた。それらの概念を用い、相互行為の多層的な局面で生起するメタ・コミュニケーションについて分析を可能にする枠組みの基盤構築を試みた。

次に、この枠組みを実際に症状当事者のメタ・コミュニケーション分析に応用した。データには成人の ASD を持つ人と、ASD の診断を受けておらず、また自覚症状もない成人(定型発達者)を対象とした二者間会話及び、その会話参加者に対するフォローアップインタビューを設定し、以下二つの談話分析を行った。

## I: 会話中で生じた参加者間のスタンスのずれの分析

一つ目の分析は初対面会話中の「ほめ」という行為を通して生じた参加者間のスタンスのずれと、彼らを取り巻く環境といったマクロな要因との関連性を探る分析である。

事例の談話分析を行ったところ、ASD を持つ人と、その症状を持たない人の間のスタンスのずれは、1つのやりとりや、1回の社会的行為といった特定のレベルに存在するものではなく、両者に固有の社会的アイデンティティや、彼らを取り囲む過去及び現在の状況といったマクロな秩序が1つの社会的行為に集約され、観察可能な形で体现されていることが確認された。以上から、近年主張されているような、自閉症スペクトラムの症状—メタ・コミュニケーション上における、軋轢やずれといった問題—は、ある特徴が断片的に、特定の階層において現れるのではなく会話参加者の持つ社会的背景や行われているコミュニケーションの状況など広範なコンテキストが、ミクロなコミュニケーションに投影される多層的なものであることが示された。

## II: ASD の症状のコミュニケーションへの表出の分析

二つ目は ASD の具体的な症状のコミュニケーションへの表出について可視化を試みる分析である。以下の会話の断片で、両者が話題としているのは、会話の収録が行われたカフェの名称についてである。この場所への訪問が初めてで、ASD の症状を持たない M が、複数回来た経験のある ASD の症状のある C に対し質問を行っている。

## 研究成果の概要 つづき

## [会話トランスクリプト]

- 01 M: ↑ 近本さんはこちらのキャットカフェに  
 02 いらっしゃるのははじめて[ですか]  
 03 C: [あ,  
 04 ↑ もう, 二年ぐらい, たっております.  
 05 M: ↑ h あそうなんですね.  
 06 あの, キャットカフェって>すみません<  
 07 今日最初 2 階に最初に伺って  
 08 [しまったんですけれども  
 09 C: [あはい  
 10 M: あの:, ひょっ↑としてほんとに  
 11 猫とかはいるん[ですか].  
 12 C: [↑ねこは:>いません<  
 13 (0.2)  
 14 M: あいないんですね((こわばった表情))  
 15 C: はい

上記の会話において予想外の回答が C から示されたことに戸惑いを見せた M であるが、後続する会話では非言語行為やパラ言語も多用し、より明示的に相手に対し状況解釈の手掛かりを呈示した。しかし C の応答は M にとって芳しいといえるものではなかったために、M はさらにあいづちを工夫するなどして C の発話を促した。だがここでも C からは期待する行為は遂行されることはなく、話題の継続が困難となったことが推察された。両者の行為をより詳細に見ていったところ、C に対する質問時、M は手振りやジェスチャーを用いることで C の発話の継続を促すサインを示す様子が見られた。他方 C は、M の質問に対して、速度を上げて簡潔な応答を返すにとどまることが多かった。また、やりとり全体は、同じ連鎖の体系をなしているユニットが全く崩されることなく継続する構造となっていた。そしてこの構造は、C の側が容易に話題の発展を行なうことが可能であった場面でも、C から積極的な発話がなされなかったことにより構築された可能性があることも明らかにされた。

この分析結果から ASD 当事者である C は症状に挙げられる「状況理解力の欠如」、「特定の行動への固執」といった ASD の症状の特徴の一部に該当すると捉えられる可能性を含んだ言語・非言語行為を表出していたことが明らかになった。また、ASD 当事者が無意識的に行い、これまで具体的に指摘することが困難であるとされてきた、ASD の症状特性の一部と認定されうる特徴が記述できる可能性が示された。

## 4) まとめ

上記の研究からは、これからの分析事例の蓄積により、対人コミュニケーションへの表出の普遍的な一般化は難しくとも、高頻度で起こる具体的行為やスタンス構築の特徴を明らかにされる可能性が大いにあることが示唆された。そのため今後も引き続き分析枠組みの精緻化を図るとともに、データ分析の実践を行っていくつもりである。

## &lt;参考文献&gt;

- Du Bois, J. W. (2007). The stance triangle. In R. Englebretson (Ed.), *Stancetaking in discourse* (pp.139-182). Amsterdam: John Benjamins.  
 Goffman, E. (1974). *Frame analysis: An essay on the organization of experience*. New York: Harper & Row.  
 Rampton, B. (1995). *Crossing: Language and identity among adolescents*. London: Long-man.

※この(様式2)に記入の成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差し控え期間等を記入した調書(A4縦型横書き1枚・自由様式)を添付すること。

**研究発表** (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

①  
合崎京子：「自閉症スペクトラムとスタンスの多層的ずれ—初対面会話の事例分析を通して—」 *Human Linguistics Review*, 創刊号, 2016, 1-15 頁.

②なし

③熊本県発達障害当事者会主催「異文化コミュニケーション—発達障害当事者との初対面会話を通して—」2015年7月20日, 熊本市大江公民館.

④学会発表

「自閉症スペクトラム者の発話意図の理解と自己開示をめぐって—コンテクストの影響の観点から—」2015年7月19日, 言語科学会第17回国際年次大会(口頭発表), 別府コンベンションセンター.

「自閉症スペクトラムの症状のメタコミュニケーションへの表出—二者間会話の共同構築をめぐって—」2016年3月19日, 第37回社会言語科学会研究大会(口頭発表), 日本大学文理学部.